

熱田本平家物語の漢字とその用法の一側面(二)

——主として巻第二についての調査を通して見た——

山田俊雄

内容要目

- 一、字典等に見えない漢字……………(七頁)
- 二、熱田本平家物語巻第二の語のうち漢字で書かれたもの(第二表)……………(七頁)
- 三、用語と用字との連関
——特に用語の時代性について——……………(二四頁)
- 四、いはゆる宛て字について
——特に熟合二字の場合——(第三表)……………(二八頁)

本稿の前回到於て示した第一表は、相異なる字の種類をすべて掲出しつゝ、同時に、その一々の字と語との対照を示した。ただし、一般的に、字音語との対照は之を省略した。それは字音語と漢字との見合ひ方を調査することは、主として

語彙論における漢語の問題の追求と殆ど相重なる事と考へられるからである。ただ、国語の歴史や変遷やを研究調査してゐる今日の水準からすれば、如何なる漢語や似非漢語が、この時期に用ゐられたかを、報告することは、むしろ何らか貢献するところがあるものと思はれる。漢和辞典の名称を冠して世に行はれる書物に求めても得られぬ、而して国語辞典にも十分な記述が行はれてゐない部類の漢語について、多少の知見を加へることは可能である。のみならず、日本に於ける漢字といふもの、漢字使用といふ現象は、ひとへに国語の視覚的表現といふ、純な簡短な現象、ではない故に、実は、某字の現実の有様は、その単字としての用法のみならず、その某字をふくむ熟字と、それに見合ふ言語とのつびきならぬい関係において始めて明かになるべきものであるとしなければならぬ。したがつて、漢字を言語との対照、参照の上で観察するといふ原則は、その一端は語彙論にも深く及ぶもの

であるべきかと考へる。本稿の筆者においては、右のことも考慮に入れて、漢語、字音語の類集を同時に作成してあるの考へてゐる。漢字について訓読する語のみを、即ち字音語ならぬ固有語とその複合形のみを、主として示すに止めた事について一言注する次第である。

さて、第一表に示した単字のうち、排列の基準に、その部首を参考した康熙字典と、ならびに類聚名義抄との照合の結果、その字体、その字そのものの、同字典に究め得なかつたものについて、言を加へる必要がある。したがつて玉井幸助氏の指摘せられたところにも触れることが生じる。巨細にわたつて論ずるときは、甚だ煩はしい憾もあること故、問題を限つて若干のことに止めて置く。未だ思ひ得てゐないこともあり、徹底してゐない項目も混ることを諒せられたい。

(一) 尙 アヒダ

この字は、十六丁オ二行目にあつて、前後を示すと、
嵯峨ノ天皇ノ帝 (衍字) 御時被テヨリ 誅セニ右兵衛督ウ藤原仲カ
成リヲニ以降々、保元マテハ君二十五代ノ尙不リシ被レ行 死罪ハ
の如くであつて、他本によつても「問」の意の語であるべきことは疑ひがない。しかし乍ら、この字の形については管見では、十分な考証を得ないでゐる。排列も思ひ当らぬままに便宜的に次第した。たゞ、「仮名文字遣」には、この字らしいものが見えてゐる。「天文廿一重陽前日記之 称名野釈御判」を末行にふくむ識語を有する本の半紙判板本によると、二十

七丁オの上段右より八行目に

あひた 問 際 頃 箇

とある。「頃」の下は、一字であるか二字であるか、さだかでない。福井久蔵氏編の「国語学大系」第九卷所収の「仮名文字遣」(これは「天文廿一重陽前日記之 称名野釈御判」の文句のある本の美濃木版本を底本とした由)では、右のところ、二十七丁オで

あひた 問 際 頃 箇

と翻刻してある。この翻刻では「ケ」と「固」とが少しばかり離れてゐるが、二字とも見えない。今、これを、合はせ考へると、或は同一のものと見てよいものであらうと思ふ。少くとも、酷似してゐると云ひうる。

(二) 僞 クツログ

(三) 書 ヨロヒ ホス

この場合、「ホス」は 七丁ウ五行目に
苔ノ濡絹 不ニ書敢ニ依テニ無実ノ罪ニ
とあるのがその唯一の例である。

(四) 味 ナク

この字は玉井氏が国字として特にその例に挙げられたところである。しかしこれは康熙字典では

玉篇、力凍切 音弄 言味也
とあり、観智院本類聚名義抄には

味 谷
弄 二弄 ツミナフ サハツル アザケル

とあつて、「嗔」とならんであらはれ、その俗字であるかのやうに解せられるのである。宋版竜籠手鑑（日本古典全集に収めたものに拠る）にも

味 音弄玉篇言也 味俗 嗔 正音弄鳥鳴二

と見える。三者の云ふところを見るに全く一致してゐるわけではないが、鳥の鳴くことを意味する字であつて、国字などといふべきものでないことは明白である。たとひ、その用法が、（二十丁ウ十行目）次のごとく

宿所ニハ女房達死人ノ蘇意チ而差会皆被ケリニ搵味等セ

原義の、「さへずる」ではなくても、やはり本来の漢字であるにはちがひない。「忝」に似たものをふくむ字では

筭——竿

の場合がある。「弄」と、「忝」「忝」「忝」の類との代替関係を認めることは妥当であらうと思ふ。「別体字類」（萩原秋巖著）によれば、「杜乾緒等造象銘」に、「筭」即ち「筭」「算」を

筭

とした例が見えてゐる。「峠」が国字であるといふことには疑を容れる余地がないやうであるが、それに類推して「味」をもそのやうに扱ふのは標当を缺くと思はれる。

(四) 嗔 アキル

これは二十三丁オ二行目に

入道 何々ト 嗔

とある一例。名義抄には

嗔 アヘキ

がある。

(六) 晒 イハズ

これは十七丁ウ一行目に

人ハ言 高ク 卑 畏 震 在シニ 昨 日 フマテセ

とある一例。前号で小考を試みたやうに「晒」の字とみると前後よく通じ、文字としても字形が判別できるかと思ふ。（なほ、前号で諸橋氏大辞典によつて引用した文は、すでに康熙字典に見えてゐるところを、一字も出てゐないので、むしろ源に就くべきであつたから、ここに付言する。）因みに名義抄では

晒 カタキ

とある。

(七) 嫌 タラル

入道白ニ祝 無ケハニ御幣（もと弊とす）ノ紙モ一嫌テ格

奉管

が、四十一丁ウ五行目に見える。

(八) 悉 ウラム

僻事 我莫悉 宣ハ

の一例、十六丁ウ三行目にある。名義抄によると

悉 ウラム（法中九〇）

があつて、字形が近い。黒川本色葉字類抄には、字の部の人事門のウラムの語の字として、「悉」が見えてゐる。

(九) 拈 ナゲサム

兼康ハ宰相ノ所ヲ歸リ聞一 恐マ 終道 漸奉ニル勞拙

の一例、三十一丁オ七行目である。
(中) 撫 ヨロコブ

小將泣ク合テソレ手ヲ被レケルレ撫

の一例。二十丁ウ七行目。これは同じ面の十行目にある一
例の「搯」(この文は例の例文と同じ。参看せられたい)と共
に、先に前号四十頁四十一頁に触れたところである。

(出) 搯 キハム

これは二十五丁オ五行目の

云ニ富貴ト一 云ニ朝恩ト一 云ニ重職ト、旁 搯

の一例。前号四十一頁上段で推定したやうなことで考へられ
る。

(出) 搯 スギ

神ノ明神ハ差ニ相立テル門ヲ一

四十五丁オ八行目。この字は、従来、和製漢字を論ずる時に
は必ず粗上に載せられたもので今更言を費す要はあるまい。

(出) 搯 ナギ

特ニ地 見ケレハ在ケルニ御熊野ノ樹ノ葉ニテツ一

四十三丁ウ八行目。

(出) 搯

搯 立ニ麿 之矣御耳ヲ一

四十二丁ウ六行目。木偏に見えてゐるが、手偏に直せば、名
義抄に「フルフ」の訓が与へられてゐるし、色葉字類抄にも

「フルフ」の訓の条に見出される。

(出) 搯 メデタシ

これは二十七丁オ十行目の

果報コソ 搯 至ラメレ于 大臣ノ大將一

三十七丁オ七行目の

哀拙 カリケル 謀哉ナ

の二例。玉井氏は国字として指摘せられた。「目出」と二字
にした例は今昔物語集などに既にあるが、この巻第二には存
しない。たゞ疑はしいことに、この「拙」の字には、もとも
との漢字としての用法がある。名義抄では

拙 アキラカナリ

とあるが、これは「拙」の字と同じもので、「拙」の字形も
見られる。倭玉篇(一・上・示・二・三)の部首順になつ
てゐる正保板「新刊倭玉篇」による)でも

拙 アキラカ

がある。「拙」の字形を日本製とするのは、必ずしも決定的
な論ではないと思はれる。漢字の構成は、一般に原理が幾種
類かに限られるから、彼我、全く相知ることなく同型のもの
を作り出して暗合することはあり得ぬことではなからう。し
かして「拙」の字形によつて「目出たし」といふあて字が
導かれたとすることは一つの推定として許されることであら
う。「拙」の字形は、用法を論ずることなければ、とにかく字
として先に存したと見ることが正しい。ただ、あて字を行ふ
より、造字をする方が段階的に見て早期であるべきである
といふ原理も立てがたいであらう。三巻本色葉には「目出

デタシ」があるが「𪗇」はまだ見あててゐない。

(イ) 𪗇 ニラム

瞳ニ イタシ 大ノ眼 シハン コラ 姑 奉レ 瞳 ニラムハ

の一例。六丁オ七行目。これも玉井氏のいはゆる国字の一つであるが、「大塔物語」(模刻本)によると、その十六丁ウ七行目に

𪗇ニ 𪗇ニ 敵勢 ニランテ

の例が見られる。たゞしこのところ、史籍集覽所収統群書類類合戦部の「大塔軍記」では

𪗇ニ 敵勢 ニランテ

とあつて異なる文字である。また「大塔軍記」の架蔵一写本(統群書類従本と編次が同じで、「飛騨国治乱記」「芦田記」と合冊)では

𪗇ニ 敵勢 ニランテ

とあつて行文もやゝことなる。

(ロ) 𪗇 フカシ

李少卿伝ヘ ニ聞テ 之ニ 𪗇 ウラム 穴 フカウツ 成 ニケル

の一例。四十七丁オ二行目。「𪗇(シン)」と同字のつもりであらう。

(ハ) 𪗇 フケ(ヌラン)

夜ハ ハルカニ 𪗇 フケヌラン 只今何何ソヤト宣ヘハ

の一例。九丁オの二行目。

(ニ) 𪗇 キハム

何況ヤ 先祖ニモ未ダ キハメサセ下フ 聞窮ニ 太政大臣ヲ

の一例。二十三丁ウ四行目。

(イ) 𪗇 オモフ

死一 生不一 知ノ 奴原成レハ 我一人ト 𪗇 勿 戰フ 程ニ オモヒキツテ

の一例。三十八丁ウ七行目。

(ロ) 𪗇 イロフ ヨル

是ハ ユイカイナキ 云弱 者ノ 秀テ 不マシキレ 締事ニ 𪗇 ハコヒニ (十二丁ウ九行目)

行綱近 フ 𪗇 ヨリ 成テ 𪗇 カコヒニ 警 (九丁オ五行目)

の二種三例である。前号でこの字が名義抄に見えると記したのは誤りで、名義抄や色葉字類抄のは「𪗇」の字の「イロフ」である。温故知新書にこの字を「ワナ」とした例がある。

(ハ) 𪗇 イノリ ウヤマフ

被タルレ 越ニ 大將ヲ 於人ニ 間ヲ 為トシ 其 𪗇 イノリ 被ケルレ 仰 (三十

六丁ウ二行目)

平家不レ 斜被レ アカメウヤマハ 崇 𪗇 ニ 候ニ (三十五丁ウ八行目)

の二種二例。

(ニ) 𪗇 𪗇

御 𪗇 十八丁オ十行目、三十四丁ウ一行目

𪗇 𪗇 四十六丁オ七行目

この字は臆測するにその草体「𪗇」などから回帰した形ではあるまいか。

(イ) 𪗇 𪗇

𪗇 ムスムスト 被ケル 𪗇 マ (十一丁ウ四行目)

これは下字「𪗇」の字形に牽引されたと見られまいか。

(ロ) 𪗇 ワランデ

設^レ可^キ登^成トモ^フ 踏^フ何^ト云物縛履^ハ (六丁オ二行目)

(㊦) 𧄸 ヤツル

浮世^ヲ外^ヨ僧^ノ 袖^ヲ𧄸^サ (三十三丁オ五行目)

(㊧) 𧄸 トホク ハルカニ

棟^ノ梁^ノ遠^ニ 秀^テ (二十九丁オ二行目)

遷^ラ天竺^ノ 詔^ニ 仏^ノ跡^ヲ (三十九丁オ五行目)

(㊨) 𧄸 フカク

雲^ノ濤^ニ 煙^リノ浪^ヲ 𧄸^フ (四十二丁オ六行目)

(㊩) 𧄸 イソゲ

丹波小將^ヲ 𧄸^イ是^ヲ給^ハ (三十丁ウ一行目)

(㊪) 𧄸 スギ

腹^ヲ卷^キ 𧄸^キ置^キ 索^ヲ絹^ノ衣^ニ 袈^ヲ袢^ヲ打^テ懸^テ (三十六丁オ十行目)

(㊫) 安𧄸

安𧄸 アンロン (四二丁オ九行目)

右にあげたものが、いはゞ疑はしい字のすべてである。しかしこの中には、はつきりと国字でないと論断できるもの、また国字と見てもよいが、しかし彼に既にその字形があり、本邦にも伝へられてあつたと見られるもの、或は、草体を介して還元される時に生じたらしきもの等を若干は指摘できた。字形としてたしかに目馴れないものが多い。さりながらそれは現代人の眼に映じた感じにすぎず、和製の漢字であるといふことに確実な論証を与へうるものは問題の性質上殆ど無いのである。これは、今後の研究課題であるが、用法の面

の特異性に比べれば用字の形の面での特質はさほど顕著ではないと予想できるのである。

二

さて、次に用法を更に語句との参照の上で一覽することにす。つまり、某語は、いかなる字によつて表記されたか？の間に答へるものである。これを第二表とする。この第二表作成の手続は、前号に示した第一表を、見出しと注とを逆にして、語毎にまとめ、五十音順に並べ替へたものである。厳密にいへば、語を本体にして、その表記法をすべて一覽するために、送り仮名や訓読符・音読符・声点のごとくに至るまでを網羅しなければならぬが、第一著手として、漢字との対照表といふことに限定した。

なほ、三巻本色葉字類抄との照合の結果を注した。「色」と記したのがそれ。これはひとへに、筆者の便宜のためといふ域を出ないのであるが、同時に、用法についての一般的傾向をうかがふ手懸りに資する所あれば幸である。

第二表

アア	𧄸
アカ	赤
アカ	汗
アカ	ス
アカ	明
	(色 アカシ)

アナニクヤ 可憎
 アノ 啊
 アハ 啊
 アハス 合
 アハツ 遽
 悼惶
 アハレ 哀
 アハレミ 哀
 アハレム 慈
 アハヤ 咬
 アヒー 相
 アヒダ 間
 面
 アフ 合
 * 寤
 アフ 敢
 アフグ 仰
 アブレ 溢
 アブミ 鎧
 アマー 天
 アマタ 数多
 アマツサヘ 剩
 アマリ 餘
 アマル 餘

色 色
 (色 アハレフ)
 色 アハレフ
 色 アフ
 色 アフ
 色 アヘテ
 (色 アフル アフレタリ)
 色 アマタ
 (色 数アマタ)
 色 色

アメ 雨
 アヤシ 異
 アヤシム 奇
 アヤマツ 誤
 アヤマリ 獮
 アユミ 步
 アラー 荒
 アラガフ 嗜
 アラシ 惡
 アラシ 嵐
 アラジ 非
 アラズ 不
 非
 アラソフ 諍
 アラタ 新
 アラデ 非
 アラネハ 非
 アラハス 顯
 アラハル 著
 露
 アラフ 洗
 アラマシゴト 在増
 アリ 在
 有

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色
 (色) (色)
 アヤシ
 アユム
 アラシ
 アラズ
 アラズ
 アラズ
 アラタニ

アリサマ 挙動
體勢

アル 荒

アルー 或

アルイハ 或

アルジ 主

アルトキ 或則

アレ 其

アレ 荒

イ 鑄

イカガ 何

イカツチ 曇

イカデ 争

イカニ 如何

イカナル 如何

イカメ 威目

イカル 怒

益(マコ)

瞋

イキドホリ 憤

イキドホル 忿

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

イキカヘル 蘇

イク 生

イクー 幾

イクサ 戰

イクラ 莫太

イケ 池

イケドル 虜

イサナフ 倡

イサ 不知

イサム 禁

イシズエ 諫

イシユミ 碇

イソ 石

イソグ 急

イカン 逾

イタ 板

イタウ 甚

イタク 抱

イタシキ 閣

イタス 致

イダス 出

イタダキ 巖

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

イタヅラ 鎮
イタマシ 徒
イタム 痛

イタル 及
痛

至 届

至 臻 鼻 搨

イタルマデ 極
至

イヅ 出

イツカ 五日

イツク 寵

イツク 何 処

何 安

イツクシム 慈

イツシカ 早 晚

イツソク 彗

イヅチ 何

何 路

色

色

色

色

色

色

色

色

色

イツクシ

イツクソ

イタル

イタル

イト 尤

糸 最

イトケナシ 幼

イトド 猶

イトナム 營

黨 遷

イトフ 厭

イトホシ 悲

イトマ 暇 慈

イニシヘ 古 宙

イノチ 命

イノリ 祈 禱

イノル 祈

イハ 岩

イハス 云 謂

イハズ 晒

イハユル 所謂

イハンヤ 况

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

イフ云

言

イフトモ 雖

イヘ家

イヘドモ 雖

イホリ 庵

イマ今

イマサラ 今更

イマシム 戒

警 誠 禁

イマダ 未

イマダズ 未

イマハ 終

イマヤウ 時勢

イモウト 妹

イヤ 不裁

イヤシ 賤

イヨイヨ 弥

イラカ 蔓

イル 入

射

色 色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色—粧イマヤウスガタ

イロ 色

イロイロノ 綵

イロクロシ 醜偏

イロフ 綺

ウ 得

ウ 卵

ウウ 殖

ウカガフ 伺

ウカブ 浮

ウキ 愼

ウキ 愼

ウキ 愼

ウキ 愼

ウキヨ 現世

ウク 享

ウク 受

ウケタマハル 承

ウケタマハル 承

ウゴカス 露

ウシ 牛

ウシナフ 失

ウシロ 後

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

ウユ

ウシロタナシ 後情

ウス失

殞

ウスー薄

ウソフク 嘘

ウタ歌

訶

譎

製

ウタガハシ 疑

ウタガヒ 詔

ウタテシ 嘸

ウタフ 訶

ウチ 中

ウツ 内

ウツ 伐

打

討

撞

擊

ウツス 遷

写

ウツタフ 訴

ウツツ 現

色 色
ウスシ

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色
懂

寤

ウヅノヒロマヘ 瑞

ウツフス 覆

ウヅム 垂

ウツル 移

ウトシ 踈

ウナヅク 領状

頓首

ウネ 咄

ウバフ 奪

ウヘ 上

ウマ 馬

ウミ 海

ウヤマフ 襖

ウラム 濼

ウラム 悽

ウラム 鬱

ウラム 恨

ウラム 怒

ウラム 悵

ウラム 恨

ウラム 零

ウラム 嬉

色 色 色 色

色 色 色 色 色 色 色 色
訃

色 色 色 色
ウラム
ウラム

色

ウレヘ 意
懟

ウロクヅ 鯛

エ

エ柄 敢

エ

エダ 枝

エビス 夷

エフ 酔

エラブ 撻

エル 彫

オ

オキ 洩

興

瀨

オキ 起

オク 置

オク 輿

オクル 送

將

祝

贈

オコタル 怠

色

エタ

エビス

エフ

エル

オキ

ヨク

ヨクル

ヨクル

ヨクル

ヨクル

ヨコタル

オコナフ 行

オコル 將

起

オサナシ 稚

オサフ 孺

推

オス 押

オソシ 遲

鈍

オソル 恐

畏

震

オソロシ 兢

怖

恐

憧

オソロシ 畏

オダシ 穩

オツ 落

オツ 追

オト 霧

オト 落

オト 落

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

色 ヨコナフ

震 標 雲 飄 溼

オドス 威

オトヅレ 音

オトド 大臣

オトナ 老

オトナシ 老

オドル 躍

オドロク 驚

オナシ 同

オノガ 已 摺

オノヅカラ 自

オノク 怖

オノレ 已

オハス 御坐

オハル 負

オヒ 生

追

オビ 帶

オビタタシ

巨 猿

色 ヲドス

色 ヲドル

色 オドロク

色 オナシ

色 オナシ

色 ヲノヅカラ

色 オノレ

色

オフ 追

生

負

オホイニ 大

オホカリ 滋

オホシ 多

オボシ 省尋

オボス 思

オホス 仰

宣

オボツカナシ 不祥

オボロケ 少 鬱

少 縁

オボユ 籠

オホン 御

オホシタメ 奉為

大ウチヤマ 宮山

大カタ 凡

大クチ 襦

大コエ 缸

大手 路

震 夥

色(後筆)

色 ヲフ

色 ヲフ

色 オフ

色 オホキニ

色 オホシ

色 ヲボロケ

色

大ヤウゲニ 翫

オモ一 面

オモクス 重

オモシ 重

思トドマル 開

オモヒ 愛

思

忖

倫

踊

腸

オモヒヤル

オモフ

想像

省容寵損懷憶慮悞恣思念

色 ヲモシ

色 オモフ

色 オモフ

色 オモフ

色 オモヒヤル

色

色

色

色

色

色(寵)

オモムク 赴

越

オメク 喚

オユ 老

オヨブ 及

憲

蔓

覃

暨

走

逮

オリ 節

オル 下

オロカ 踈

オロス 下

オレ 御

オンココロ 御意

オンタメ 御意

オンワタリ 御坐

カ

カ 敷

ガ 之

カウ(ク) 斯

カウベ 頭

色 色

色 オイタリ

色 ヲイタリ

色 ヲヨフ

色 ヲヨフ

色 ヲヨフ

色 迄 ヲヨフ

色 ヲヨフ

色 オリ

色 ヲロカ

色 オロス

色

色

色

色

色

色

色

カウムル 被
 カカグ 蒙
 カガミ 鏡
 カカル 懸
 カカル 斯
 カキ 籬
 カキ 搔
 カギリ 限
 カギル 限
 カク 繫
 カクス 窄
 懸 放
 搔 懸
 陰 匿
 カケマクモ 掛
 カケル 翽
 カコム 困
 カサナル 重
 カサヌ 重

色
 カウフル
 カウフル

カシコシ 累
 カシコマル 聖
 カズ 数
 カズカズ 加
 カゼ 風
 カタ 形
 カタ 刑
 カタ 角
 カタ 瀉
 カタ 片
 カタ 方
 カタアシ 躋
 カタガタ 旁
 カタキ 敵
 カタサ 難
 カタシ 難
 カタジケナシ 忝
 カタチ 形
 カタナ 容
 カタナ 刀
 カタブク 傾
 カタヘ 諸

色
 カタエ
 カタシ

カタム 固

カタラフ 語

カガタリ 語 認

カタル 談

カチ 歩

カチヌ 剋

カド 門

カナ 哉

カナシ 慄

カナシク 悲 顔面

カナシム 悲

カナフ 勞

カナフ 證

加 周

協 叶

称 應

カナモノ 鋸

カナラズ 必 忘

必 忘

色

色

色 色

色

色 カナシム

色

色 色

色 色

色

色

カナラズシモ 必

カヌ 匣

カネ 難

カネテ 兼

カノ 彼

カハ 川

カハ 革

カバネ 骸

カハラ 瓦

カハル 送

カハル 送

カハル 送

カハル 送

カハル 送

カハル 送

カハル 送

カモナシ 弱

カフ 代

カフ 替

カフ 遷

カフ 壳

カフ 黓

カフ 銅

色

色

色 色

色

色 色

色

色 色

色 色

色

色

カプト 甲
カヘス 鉀
カヘスガヘス 覆
カヘリ 返
カヘリミル 願
カヘル 還
カホル 帰
カホ 良
カマフ 顔
カマフ 搆
カミ 神
カミサブ 髮
カミサブ 神宿
カメ 龜
カヨフ 通
カラニ 柄
カラム 搦
カリ 鷹

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色

カヘル

カリギヌ 薺
カルガユエニ 故
カルシ 肆
カルシム 輕
カルシム 標
カレ 彼
カレタリ 稿
カロンズ 輕
キ 輕
キ 木
キギ 木
キカス 聞
キク 聽
キク 聞
キコシメス 聞
キコユ 聽
キコユ 聞
キサキ 后
キサキ 暗
キザム 刻
キザム 姤
キシ 岸

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色

カル

キラフ 嫌
 キヨシ 清
 キヨゲ 清
 キユ 銷
 キモ 肝
 消
 官
 君
 仁
 キミ 主
 キビシ 蜜
 握
 キハム 窮
 キハマル 谷
 キハ 際
 キノフ 昨日
 キヌ 絹
 キツト 急
 キタル 来
 キタ 北
 キセナガ 鏝
 キズ 疵
 キス 著

色 色 色 色 色 色 色 (色 王) 色 色 色 色 色 色

キル 著
 キル 伐
 キンダチ 誅
 切
 刻
 公達
 君達
 働
 ク 来
 ク 括
 ククム 合
 ククル 括
 クサ 草
 クサズリ 鉸
 クシ 髮
 クズ 絮
 クダク 棧
 クダル 下
 霍
 クダンノ 件
 クチ 口
 クチズサム 瞞
 クツ 沓

色 (俗用トス) 色 色 色 色 色 色 色 色

クツ 朽
クツロク

罪 俳 僂

クドク 詢

クニ 国

クハ 桑

クハダツ 企

クバル 賦

クヒ 食

クビ 頸

クモ 雲

クモ 蜘蛛

クモリ 雲入

クモル 曇

クヤシ 悔

クヤム 悔

クユ 悔

クラ 鞍

クラウド 藏人

クラウス 蔽

クラシ 曬

クラス 暮

クラヤミ 霾

色

色

色 色

色

色

色

色

色

色

色

クフ

クラキ 位

クル 暮

落 曬

クルシ 苦

クルシム 苦

クルヒ 狂

クルマ 車

クレナキ 紅

クロ 黒

ケ

ケ 園

ケサ 今朝

ケサヨリ 且来兮

ケシカラズ 奸

ケシカル 俄

ケシキ 三

気色

ケス 銷

ゲニ 勝

実

ケフ 今日

ケブリ 煙

ケル 蹴

色 色

色

色

色

色

色

色

色

色

色 色 色

クレフ

クルフ

クロシ

クエル

コー木
 コ子
 コグ漕
 コケ撈
 ココニ此
 是維爰惟
 コー小
 小ゴエ譽
 ココチ意
 ココチヨゲ嬪
 ココロ心
 汝情汝
 意汝
 精汝
 ココロゴコロ
 ココロザシ志
 心ウシ罹

色 (色 心々)
 色
 色 色 色 色 色
 色 (榜)

心グルシ 辛
 心ボソシ 紫
 心ヤスシ 懷
 コシ 興
 コス 越
 コタフ 答
 コト 言
 事
 コトゴトク 悉
 コトシ 今年
 ゴトシ 如
 字
 コトトモセズ 不 辭
 コトナリ 異
 コトニ 殊 特
 一 故
 ゴトニ 每
 コトノハ 哥
 コトバ 詞
 コトワリ 理
 制 攏

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色
 コトハル
 コトハル

コノ 此
 コノカタ 来
 コノゴロ 此嘗
 コノミ 菓
 コハ 呼
 コハシ 強
 コヒ 請
 コビ 媚
 コヒシ 恋
 コフ 恋
 コボル 漏
 コマコマト 細々
 コマヤカニ 濃
 コム 込
 コモル 込
 コユ 超
 コヨヒ 今夜
 コリ 凝
 コレ 此

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色
 コル
 コヒ
 コヒ
 コフ
 コヒル
 コヒタリ

コロ 比
 コロス 害
 コロホヒ 黎
 コロモ 衣
 コエ 音
 粟 霍 声 襦
 サ 佐
 サウラウ 候
 サガシ 崖
 サガナシ 無患
 サカヒ 域
 壘 塞 堦 城
 壘 壘 壘 壘
 サカユ 翁
 サカン 意
 是 之

色 色 色 色 色 色 色 色
 サカリ

サキ 先

前

サギ 鷺

サキダツ 先割

サキワカツ 割

サク 割

サグ 下裂

サケ 酒提

サケ 酒體

サケブ 叫

ササグ 奉

ササメク 南北

ササヤク 咬

サシオク 閣

サシモ 下手

サシハサム 揃

サス 差

サス 指

サスガ 捲

有繋

有繋

有繋

有繋

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

サダマル 流車

サダム 定

サツク 折

サテ 授

サテコソ 將

サト 里

サハ 郷

サハ 而

サハ 沢

サハ 阜

(サハ 左右)

サハガシ 躁

サハグ 驢

サブラヒ 侍

サブラフ 候

サハ 副

サマ 様

サマザマ 方

サマ 方

サマ 方

サマ 方

サマ 方

サマ 方

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

種
サマザマニ 漸
サム 醒
サヤマク 戩
サユ 冴
サヨ 霄
サラニ 更
サラバ 而
ザリ 不
サリトモ 遍
サリトテハ 去而
サル 去
サルニテモ 将
サレドモ 去而
サレバ 而
サヲ 偲
サヲシカ 霰
サンヌ 去
シ
シ 不
シウト 舅
シカシナガラ 併
シカノミナラズ 加之
シカル 然

色 色 色 色 色 色 色 色 色

シカレドモ 然而
シキナミニ 頻
シキミ 瘰
シキリニ 暫
シゲシ 頻
シゲル 檣
シタ 下
シタガフ 舌
シタシ 親
シタタム 認
シタツ 誌
シタハシ 慕
シヅム 静
シヌ 死
シナジナ 科
沉 圓

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色
シタフ
シキリ

ス 簾
 ズ 不
 スウ 居
 スガタ 躰
 麗 槻
 |スガラ 終 竟
 スガル 繫
 スギ 相
 スグ 過
 スクフ 濟
 スゲル 勝
 殊 逸
 スケ 助
 佐 亮
 スコシ 僅
 細
 スゴス 過
 スサマジ 白
 スサミ 遊
 スサレタリ 醜

色 色 色
 色 スフ
 色 スコシキ
 (色 名字門)

ススグ 漚
 ススミイツ 蹠
 進
 スヂ 筋
 スツ 弃
 接 損 贊
 スデニ 已
 既
 スハ 噴
 スナハチ 則
 憎 婦
 スハマ 水 軋
 スベテ 都
 スマス 澡
 スマキ 栖
 スミ 墨
 スミ 住
 スミカ 栖
 窟
 スミゾメ 僧

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色
 スム スム
 スム

スミヤカニ 趣

スム 住

スル 澄

スエ 末

セ 為

セウセウ 三五

セム 責

セメテ 標

ソ 詰

ソギ 刻

ソコ 其

ソコハカト 無限

ソコハカトナキ 無限

ソソロク 超

ソデ 袖

ソト 外

ソノ 其

ソハ 爾

ソハ 圃

ソハ 傍

色 色 色 色

色

色

色

色

ソハタツ 峙

ソバム 喬

ソビユ 聳

ソフ 副

ソムク 背

ソモ 乖

ソモソモ 某

ソラ 徒

ソレ 槌

ソレ 夫

ソレ 其

ソレ 爾

ソレモ 某

ソレモ 其

ソレモ 其

ソレモ 其

ソレモ 其

ソレモ 其

ソレモ 其

ソレモ 其

ソレモ 其

ソレモ 其

ソレモ 其

ソレモ 其

色 色 色 色 色 色 色 色

ソビウ

ソレ

タビ 度
 旅 色
 タビタビ 般
 タヒラゲ 征
 タフ 耐
 堪 色
 タブ 賜
 給 色
 タヘナリ 妙
 タフダリ 賜
 給 色
 タマ 玉
 瑞 色
 タマシヒ 魂
 タマツサ 玉章
 タマフ 給
 賜 色
 タマハル 賜
 タミ 民
 タメ 為
 タメシ 様
 タモツ 持
 タモト 袂
 タヤスク 輒

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色
 タヤスシ

タユ 断
 タヨリ 便
 タル 足
 垂 色
 タルキ 椽
 タレ 誰
 鶉 色
 タヨヤカニ 嫺
 タヲル 域
 羨 色
 子 色
 血 色
 乳 色
 チウゲン 園
 中門 闕
 チカシ 近
 逦 色
 瑩 色
 チカヅク 迫
 櫻 色
 チカヒ 誓
 チカラ 力
 チギリ 契
 契 色

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色
 チギル

チチ 天
 チト 小
 チラス 散
 チリヂリ 散々
 ツ
 ツイデ 次
 ツイ 腕
 ツカ 欄
 ツカサ 官
 ツカサドル 掌
 ツカノマ 片時
 ツカハス 遣
 ツカヒ 夫
 ツカフ 使
 ツカマツル 仕
 ツキ 月
 ツギ 籠
 ツギ 次
 ツキセズ 不竭
 ツク 不罄
 ツク 付
 属 就

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色

ツク
 ツク

ツグ 著
 ツクス 号
 ツグ 突
 繼 殞
 拮 竭
 調 尽
 竭 殞
 空 竭
 造 作
 ツクル 空
 ツク ロフ 造
 ツケテ 詞
 ツタナシ 拙
 ツタハル 伝
 ツタフ 付
 ツク 連
 ツク 管
 ツツシム 謹
 ツツミ 篋

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色

ツグ

ツツム 外 褻

ツテ 伝

ツト 頓

ツドフ 会

ツトメ 勤

ツナヌク 櫻

ツネ 常

ツネニ 安

ツバサ 翼

ツネヨリモ 例今

ツバサ 職 義 恒 安

ツハモノ 兵

ツヒニ 竟

ツヒニ 纒 遂

ツボ 壺

ツミス 辜

ツミ 罪

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

ツム 摘

ツモル 積

ツヤツヤ 一切

ツヨシ 強

ツユ 露

ツラ 面

ツラヌ 頬

ツラヌ 連

ツラツラ 情

ツラナル 連

ツル 鬮

ツルギ 劍

ツレヅレ 徒然

ツレテ 將

ツレナシ 強顏

ツエ 杖 強面

ツエ 杖

テ 手

一テ 而

一デ 而

テニテニ 手々

ト 与

ト 与

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

ツエ

トー鳥
 トイフ与
 トウトウ急々
 遇
 トガ失
 科
 トカウ左右
 トキ時
 トク詞
 トグ遂
 トコロ所
 トコロドコロ往
 トコシナへ鎮
 トシ速
 年
 歳
 トシゴロ年来
 頃
 トス欲
 トヅ閑
 トテモ乍
 トトノフ調
 トドマル留
 トドム止

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色

トナフ留
 トナフ唱
 トノ殿
 トバス轂
 トビー霍
 トフ問
 弔
 トブラフ訪
 諮
 トホサカル遐
 トホシ遠
 極
 トホル通
 トホツス欲
 トモ伴
 共
 将
 等
 ドモ而

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色

トモカクモ 左右
トモガラ 儻

トモシビ 燈

トラハル 囚

トリ 挿

鳥 覚

トル 取

柄 擗 撈 掬 擣 擗 搏 捋 挑 拈 揅 執

色 色 色 色

色 色 色

色 色 色

トヲ 十

ナ

ナ名

莫

ナカ 中

宮

一ナガ 長

ナガエ 轅

ナカゴロ 中止

ナガス 流

ナカバ 半

ナガム 詠

ナガラフ 存

堪忍

ナガル 流

ナガレ 流

ナカンヅクニ 就中

ナキ 無

ナギ 棕

柳

ナギサ 渚

ナギナタ 長刀

ナク 泣

味

色

色

色 色

色 色

色

色

色

ナガシ

ナグ 投
 ナグサム 拈
 ナクナク 泣
 ナゴリ 名残
 ナゲキ 嘆
 ナゲク 歎
 ナゲク 擲
 ナゲ 無
 ナサケ 情
 ナシ 為
 無
 無
 無
 ナシカハ 何事
 ナス 成
 ナミソ 莫
 ナダム 宥
 ナツ 夏
 ナツ 捫
 ナツカシ 懷
 ナツク 名

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色

ナド 矣 (號) 号
 何
 等
 ナナメ 斜
 ナニ 何
 ナニトナウ 特地
 ナハ 繩
 ナホ 尚
 ナホミゴトシ 猶
 ナホシ 欄
 ナホス 直
 ナホモ 備
 ナホル 直
 ナマジヒ 愁
 ナミダ 泪
 ナミ 浪
 次 濤
 ナム 井
 ナヤマス 惱
 ナヤム 惱
 ナラス 鳴

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色

色(備) ナホ
 色 ナオル
 色(酒)
 色 ナホシ(ノコロモ)
 色 ナホ

ナラヒ 習
ナラビ 并

ナラフ 雙

ナラフ 習

ナラフ 并

ナリ 也

ナル 為

ナル 成

ナンゾ 何
鳴 駟
二 盍
ナンゾ：ザラン 盍

ニ 於

ニオイテ 於

ニグ 逃
捨

ニクシ 惡
ニシ 西

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

ニシキ 錦

ニシテ 於

ニタリ 似

ニハ 庭

ニハ 者

ニハカ 俄

ニホフ 句

ニラキ 藎

ニラマフ 睨

ニル 似

又 畢

又 貫

又 キンヅ 抽

色

色

色

色

色

色

色

ニラ (飲) 辭

ニラク

ニラム

又 ク

又 キイツ

ネガフ

ネカフ

ネガフ

ネカフ

ネガフ

ネカフ

ネガフ

ネバ 弗

ノ 野

ノガル 遁

ノキ 檐

軒

ノコス 残

ノコル 残

賭

ノス 上

ノゾミ 望

ノゾム 泣

ノタマフ 宣

ノチ 後

ノノシル 匄

ノブ 延

椿

ノボス 登

ノボル 上

登

昇

躋

ノリト 祝

ノル 乘

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

ノロハル 入

ハ 入

ハ 端

ハ 者

ハ 葉

ハ 者

ハカナシ 愚

ハカマ 袴

ハカラヒ 計

先表

ハカリ 秤

バカリ 計

ハカリコト 論

論

謀

計

測

ハカル 擦

ハカル 察

ハカル 量

ハカル 議

ハカル 測

ハク 著

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

色

ハシメハ 肇
 ハシメテ 始 甫
 ハシメ 孟 旭 肇
 ハシマル 初
 ハシ 端
 ハサミ 鋏
 ハザマ 披
 ハコブ 運
 筥
 ハコ 箱
 ハククム 履
 育

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色

ハシメ
 ハシム
 ハサム

ハマ 浜
 ハベル 侍
 ハヒ 這
 ハハ 母
 ハハカル 憚
 ハヌ 勿
 ハナル 離
 ハナツ 放
 ハナサク 榮
 ハナ 花
 ハナ 密
 ハテ 終
 ハヅル 端
 ハヅス 弛
 ハヅカシ 憊
 恥
 ハツ 終
 ハチガマシ 辱
 ハチ 聽
 郵
 ハタ 旗
 ハス 馳
 ハシリ 走
 ハシラ 柱

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色

ハフ
 ハベリ
 (聰)
 ハシル

ハヤ 早
 ハラ 腹
 バラ 輦
 ハラカ 腹赤
 ハラハラ 発々
 ハラフ 払
 ハラム 孕
 ハル 春
 ハルカ 緬
 曠 緬
 遡 緬
 還 緬
 迴 緬
 諛 緬
 ヒ 日
 火 日
 赤 日
 ヒイツ 秀

色 色

ハヤシ
 ハヤシ

ヒガ 僻
 ヒガコト 僻
 ヒガシ 東
 ヒカフ 曳
 ヒカリ 光
 輝 光
 曳 光
 引 光
 接 光
 掎 光
 揄 光
 擗 光
 檣 光
 楼 光
 (ヒツ) 掣
 ヒキハル 辮
 ヒゴロ 項
 ヒザ 膝
 ヒシ 芍
 ヒシト 薑
 ヒシメク 薑
 ヒジリ 聖

色 色

ヒカシ

ヒタ直

一向

ヒタスラ一向

ヒダリ左

ヒト人

倫

ヒト一

ヒト一

ヒトトセ一周

周関

ヒトビト倫

ヒトリ體

ヒマ間

敷(ママ)

ヒメ姫

ヒラク推

披

開

ヒル蛭

昼

ヒロ一広

ヒロク荒

ヒロフ拾

擲

色色

色

色(色)

惟)

色色

色色

色色

ヒロシ

ヒロム弘

フ

フカウ窈

フカク邇

フカシ邃

窠

窪

深

深

フク吹

フケー深

フケヌラン窟

フサ房

フサガル菌

フシマロブ蹠

フス伏

覆

フセグ防

攘

フタ蓋

フターニ

フタゴコロ貳

色色
奈

色色

色色

色色

色色色

色色色
フタツ

マク 卷
マクラ 枕 負
マコト 寔 覈 誠
マコトニ 寔
マシテ 階 不
マジハリ 交
マシマス 坐
マジリ 接
マタ 亦
マタク 全
マチマチ 雜
マツ 待 松
マヅ 先
マツリコト
マデ 至
マド 窓
マドフ 纏 迷

管 宰

色 色 色
色 色 色
色
色
色
色
色
色
色
色
色
色
色

マドロム 寐
マナコ 眼 寤
マナジリ 眸
マナブ 学
マヌカル 免
マネ 似
マネク 招
マハル 廻
マヒ 舞
マヘ 前
マホシ 欲
ママ 任 当

マモル 護
マヨフ 迷
マレ 稀
マキラス 奉
マキル 参
ミ 進
ミ 実
ミ 三

色 色 色 色 色 色 色 色 色
色 色 色
色 色
色
色
色
色
色
色
色
色
色
色

ミ一見
ミ御 瞻
ミイダス 障
ミカド 帝
朝 晉
ミギ 右
ミジカシ 短
ミス見
ミダリガハシ 奸
ミチ 徑
道
途
ミチスガラ 終道
ミチビク 引導
ミツ三
満
湯
ミツ水
ミツカラ 自
ミツクキ 筆

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色
ミル ミル

ミナ皆
ミナミ 南
陽
ミナギル 漲
ミネ 嶺
ミノチ 水内
ミマヤ 厩
ミシ耳
ミヤ宮
ミヤコ 洛
都 良
ミユ見
蹠
ミル見
鏡
靦
靦
都(マコ)
ミワ神
ム
ムカシ 憶

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色
色(御)

ムカフ 向 適 嘗 憶 昔
 ムカハル 当
 ムク 向
 当
 ムクウ 報
 ムコ 聒
 ムシ 虫
 ムス 生
 ムスブ 掬
 ムスメ 女
 ムズムズト 蹀躞
 ムセブ 咽
 ムチ 鞭
 ムツノク 陸奥
 ムナ― 胸
 ムナシ 捐
 ムナシクス 空
 ムネ 旨
 胸

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色
 色 ムナシ
 色 (俗用)
 色 ムクフ

ムネ 棟 臆 膺
 ムネット 宗
 メ 目
 奴
 メグラス 廻
 メシトル 囚
 メス 召
 著
 超
 メヅ 躄
 メヅラシ 希
 寵
 靈
 眇
 メデタシ
 メデタカリ 眇
 メノト 孀
 毛
 毛 藻
 モシ 若
 モダユ 唄
 モチキル 用

色 色 色 色 色 色 色 色 色
 色 色 色
 色 (色目出メデタシ)
 色 (色目出メデタシ)

モツ 持 尋

齋 撥

モツテ 以

モテアソブ 賞

モテナス 賞

モト 故

本

許

下

廻

モトモ 尤

最

モトヨリ 元来

旧来

素

モノオモヒ 襟

モノアハレ 慾

モノウシ 懶

モノガタリ 語

モノノフ 武士

モノ 物

言

色 色

モテ

者

食

百

燻

催

洩

洩

漏

唐

箭

漸

漸

早

燒

社

社

安

安

休

奴

鯨

鯨

鯨

色 色

ヤク

ヤウヤク
ヤウヤク
ヤウヤク

モル

ヤハラグ 零
ヤマ 山

岐 嶮 嶮 嶮

ヤマト 倭

ヤブル 敗

壊

ヤヤ 良

ヤル 遣

秉

ヤンコトナシ 貴兮

ユ

ユ 湯

ユカ 床

ユカデ 踏

ユカリ 縁

ユク 行

進

逝

遷

ユビ 指

ユフ 結

色

色 ヤマトゴト

色 色 色 色

(色) 色

色 色 色

色 色

祺 (云)

ユブクロ 麩

ユフザレ 夕去

ユフベ 夕

ユミ 穿

ユメ 夢

ユユシ 凡優

ユル 汰

ユルス 許

ユエ 免

ヨ 容

ヨ 故

ヨ 世

ヨ 夜

ヨウサリ 夜去

ヨウベ 昨夜

ヨカル 能

ヨキ 克

ヨク 能

ヨク 能

ヨクヨク 妍

ヨクヨク 祚

色

色

色 色

色 色

色 色

色 色

色 色

色 色

色 色

色 色

色 色

ユヘ

ヨシ

ヨシ

ヨシ

ヨシ 由 體
 ヨシヨシ 越々
 ヨス 資
 連 連
 抛 寄
 寓 僑
 倚 僑
 面 遠
 ヨリ 遠
 ヨソホヒ 粧 儀
 ヨツテ 仍 依
 ヨド 淀
 ヨナ 別
 ヨハシ 弱
 ヨム 読
 ヨモ 不 及
 ヨモスガラ 終 夜
 ヨリ 茲 (マ) (マ)

色 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色

ヨドム
 ヨドミ

ヨル 因
 連 行
 寄 寄
 夜 夜
 ヨルヒル 夜 昼
 ヨロヒ 鏡
 書
 ヨロフ 擲
 賞
 ヨロコブ
 癡
 (搵・撫)
 万 萬
 ヨロツ
 ラ 等
 ラル 見
 被
 ル 見
 被
 ワガ 吾

色 色 色 色 色 色 色 色

我

ワカシ 若

ワカツ 分

ワカル 割

ワキニハサム 挾

ワキマフ 弁

ワク 分

披

ワスル 忘

語

ワタクシ 私

ワタス 渡

ワタル 渡

ワヅカ 僅

ワヅラフ 累

ワラウベ 童

ワラビ 蕨

ワラフ 咲

ワラベ 童

ワランヂ 踏

ワルビレタリ

我

キナカ 鄙

鏗

色 色

色 色

色 色 色 色 色 色

色 色

色 色

キル 居

工

エミ 咲

エム 咲

ヲ

ヲ 緒

於

ヲトウト 弟

ヲトコ 男

ヲバ 者

ヲハル 終

ヲヒ 笈

ヲンナ 女

色

色 エム

色 オ

色 ヲトオト

色 オトコ

色

色

右の第二表によると、熱田本平家物語巻第二に、漢字を以て表記された、語形（連語をふくむ）は項目にして約一千二百九十五、それに対して用ゐられた相異なる字及び字連結の項目は一千八百七十五。一語について多くの相異なる文字が照応するのは、たとへば、イタルの六字、ウツの五字、オトスの五字、オモフの十二字、オヨブの七字、カナフの七字、カハルの六字、など。以下は表について見られ、ば直ちに明かである。たゞし、宛字のやうな項目もあるから概数ですべて計つてあるので厳密ではない。そして、一千八百七十五の項目のうち、色葉字類抄三巻本と対照の末に、一致または近

いもの、その項目の下に注したが、その総数は、約一千九十である。熱田本平家の漢字の用法の五十パーセント以上は色葉字類抄の内容と一致するものであることは云ひうるのである。しかし、それは微細な点で興味ある食ひ違ひを見せてゐる。先に、第一表において類聚名義抄との対照を、極めて難駁ながら示して置いた。それは、某字が名義抄に登録されてゐてしかも訓が、熱田本平家巻第二の場合と、全く一致するか、極めて近いが、または何らか縁があるかといふ点がみとめられるならば、特に指摘したのであるが、訓が一致するかしないかといふことは、実は、双方のふくむ語の比較を試みることになるわけである。類聚名義抄のふくむ全和語を、単一に取扱つて差支へないといふことは、早卒に論じられまいが、従来漢文訓詁の側での資料といふ風に目して来た見当は決して外れないやうである。したがつて、基本の語と思はれるものでありながらその類聚名義抄にふくまれてゐないものは、もう一方の極において、つまり和文の系統のものとして集成される筈の語だと見てよいわけである。しかし乍ら、三巻本色葉字類抄のやうなものになると、そのことは、従来はさほど判明してゐたとは云ひかねるのである。院政時代の及びそれ以前の言語の映し出しと見るのが普通であらうが、どんな文脈のものか、どの文体の要素としての言語かは、いさゝか明瞭でないといはねばならぬ。筆者はかつてこの問題を部分的にとりあつた小論をなしたことがあるが、その問題を念頭におきながら、第一表、第二表を見ると、文字の

問題から、早く用語の問題に進みたい衝動を覚えるのである。真名本が仮名本から、その転字といふ作業を経て成立するといふ特殊事情があるにせよ、いづれ、文字は言語の賓であることには大した違ひがない。けれども漢字は、前に指摘したやうに、日本語の同一某語について、多数があてはめられることがあるのである。それは漢字について、言語表記の作業ときりはなして智識を多く有するなら、有するだけ多くの異なつた文字が脳裏にうかぶやうな仕組になつてゐる。中国語としては一々の字は別の語である筈なのに、日本語においては、同一の語形にひとしくコレスポンドするといふやうな事情になつてゐる。したがつて、最小限度どの程度の漢字で表記が一往の用をなすかといふことを云ふにも、個人による漢字についての感覚や知識の差が大きいから、なか／＼基準を求めがたい。たゞ、一語について、ふんだんに漢字を多く、繰出して使用できるといふ事は、その表記者が漢字について特に関心を有する底の人であるといふことを物語るといつてよい。また、ヴァリエーションが絶えず流れ出るといふことは、漢字を美しく用ゐようといふ程の知識人ならば、今日の時代にもあることである。第二表に示された某語に対し十数字といふ対照は注目してよいことである。

三

平家物語は、和漢混淆文の典型としてその価値を称揚されて久しい。その美文の基調は、おびたゞしい漢語のあやなす

ところであるといふのも、ほとんどの正しいところであらう。かかる文章において、漢字の果たす役割は漢語・字音語において特に大きい筈で、真名本であれ仮名本であれ、それは変らなないものと思はれる。しかし和語については、漢字はいかにも用ゐるが自由なわけで、用ゐてもよし、用ゐずともよし、架蔵平仮名本（慶長十六年奥書本）のごときは、実は漢語さへもほとんど平仮名で流麗に書き下されてゐる。そのやうな場合に、漢字について、いはゞ異常な関心と執着とをもつて書かれた真名本が、どんな漢字を用ゐたかは、漢字の形音義の三要素間に見られる相互連関性の組織の探究にとつて極めて興味ある対象である。某語を記すべき漢字は、AとBとCとあつて、それ以外にないといふ場合もあるが、他の某語については、それに見合ふ既成の文字がないといふ場合もあるわけである。たとへば、俗語・新語・方言・擬態語・擬声語については、そのやうなことが容易に考へられる。この巻二の例ではないが、「アハレ」には「哀」が対応する習慣があつたけれども、「アハレ」の変形である「アツパレ」にはそれが対応するとはきまつてゐなかつたものであらう。したがつて「適」とか「天晴」とかがあてられた。「ヤウヤク」にはまぎれなく「漸」が対応しても、「ヤウヤウ」となつては「漸」の外に、「様々」の字面が接觸して来るので特殊な事態がおこつた、といふことは既に見た通りである。

「シバシ」と「シバラク」との二語は、本巻に併存する。

「シバシ」に対しては「姑」（六〇六）、「少」（二〇二）

「暫」（十二ウ二）、「領」（十三オ六）、「不久」（二十ウ二）の五種が用ゐられてゐる。「シバラク」の方は、「姑」（三十五オ六）、「釐」（十九ウ八）、「苜」（二十オ九）、「小選」（八ウ二）、「小時」（十九オ九・二十オ十）の五種。相重なるものは「姑」一つである。ところが、名義抄・色葉字類抄との対照の結果では、「シバシ」の訓がそれらの字のどこにもあたへられてゐないことが明かである。のみならず、兩辭書ともに「シバシ」の単独の語形を有してゐないのである。

「シバシバカリ」の訓が、名義抄では「一餉」に対し、字類抄では「小時」に「シバラク」の従として、見出されるに過ぎない。「シバシ」といふ語は、筆者の疎略な調査によると竹取物語・源氏物語をはじめ和歌や物語の流れの文章には常によく姿を見せる語であつて、決して珍しくはないし、むしろ基本の語であらうと考へられる。それに対して「シバラク」は漢文訓読の資料に見えるもので、本来「シバシ」と拒斥し合ふやうにして姿をあらはしてゐたものやうである。平家が物語の和漢混淆といふことの性格の一端は、このやうなところに判然とあらはれてゐて、既に國語史としては新しい段階が展開した後のことと見てよい。而して、（名義抄はさておき）色葉字類抄には、「シバシ」が見あたらないのであつてこの点から、色葉字類抄の内容の古めかしさが伺はれるといつてよい。「暫」や「姑」が「シバラク」と訓じうるなら、直ちに「シバシ」とも手をつないで差支へないわけで、現にこの熱田本平家はさやうにして用ゐてゐるのに、字類抄では

その語すらも登録してゐないのであるから、この辞書の成り立ちには新しい体制でありながら必しも新しい内容を盛つたものとはいへないのである。ともあれ、熱田本平家によつてうかゞはれる、この種の現象は、このものみに限らず一般に漢字使用の現況と、漢字字書の内容とのへだたりを考へさせる重要な材料であるといはなければならぬ。

次に「オビタタシ」を例にあげて見る。これは

- 巨 (二十九丁オ一)
- 猿 (二十九丁オ四)
- 夥 (九丁ウ九)
- 震 (十丁ウ五)

の四種がある。この語は名義抄の和訓には一例も見えず、三巻本色葉字類抄では「夥オヒタ、シ」が、於部の員數門に見えるが、中巻にあつて黒川本なる故、複製本ではさだかではないが後の人の書加へのやうに見える。本来存しなかつたと見て大過ない。大言海などによつて見ると、宇津保物語吹上下に見えるといふのが古い例のやうである。(大言海、大日本国語辞典はじめ多く「吹上の上」とするが実は「吹上の下」の巻にある。) しかしその後は物語日記の類に例が見えず、讚岐典侍日記や堀川院百首に見える。方丈記には三例。保元・平治・平家などには比較的多く例がある。この「オビタ、シ」は漢文訓読の側のものでもないやうで、「巨」「夥」は通常「オホシ」の訓が与へられるものである。宇津保物語

の例は、本文についての疑ひが一般的に解除されないのではらく措く。とすると、この語のあらはれ方には明かに一つの傾向があるといふべきである。即ち院政鎌倉期の時代語らしい姿が髣髴として来るのである。今昔物語巻第五の第一話に見える

可為^キ方无^ウテ遙^ニ補陀落世界ノ方^ニ向^テ心ヲ発^シテ皆音ヲ挙^テ観^ル
音ヲ念^シ奉^ル事无限^シ。其ノ音余オヒタ、シ。

は、片仮名書きで漢字があたへられてゐないのが注目すべきことであるが、これらをはじめとして、宇治拾遺・古今著聞集・沙石集などの系譜に属する語として見ることが、平家物語の時代としてはもつとも穩当なところであらうと思ふ。この熱田本平家の同類としては、前にあげた大塔物語模刻本に「剡」(十四丁オ)がある。恐らくは定つた漢字の訓としての位置を占める語ではなかつたものと思はれる。それから

ぬか、後世の辞書で、
 晉^{ヲヒタタシ} 生便敷^{ヲヒタタシ} 大多敷^{ヲヒタタシ}
 緩^{ヲヒタタシ} 又云 焱^{ヲヒタタシ}
 童唱^{ヲヒタタシ} 莫大^{ヲヒタタシ}

- 焱 (温故知新書)
- 焱 (天正十八年刊節用集)
- 焱 (伊京集)
- 焱 (黒本本節用集・饅頭屋本節用集)

焱^{ヲヒタタシ} 動・震^{ヲヒタタシ} 慘敷^{ヲヒタタシ}
 焱^{ヲヒタタシ} 緩^{ヲヒタタシ} 大多敷^{ヲヒタタシ} 生便敷^{ヲヒタタシ}
 などと、種々の字があてられて居り、宝永二年刊の増補広益字尽綱目なども

- 夥^{ヲヒタタシ} 焱^{ヲヒタタシ} 大多敷^{ヲヒタタシ} 生便敷^{ヲヒタタシ}

などと記してあつて、用字の種類にかけては、先にのべた基本語について字の種類が多いのと同様である。しかしその意味は大いに異なるものがある。漢字についての訓は、思ふに元来漢文をよみ下して理解してゆく過程において、一々の語の意味を日本語としていひかへたものであるから、字に即してゐるものである。漢字に対応するから訓であつて、それは自由にある日本語とは、別のものとみることが出来る。自由な日本語すなはち、漢字の訓といふ役割をもたない日本語は実はおびただしくあつたわけである。それが漢字によつてすべて表記できると（少くとも語根とか語幹とかの部分はずべて出来るものと）考へることは、やはり漢字に縛られた考へ方であつて、さうなると日本語のすべてが、とにかく不定の単字を相手とする、あるいは不定の複数のものの連結を相手とする關係を強制されることになるのであつて、そこには極めて不合理・不自然が生れることになつたのも止むを得ないことであつたらう。この「オビタタシ」の場合は、その一つであらう。

また「クドク」の場合もそのやうに考へられる。

詢（二十五才十、二十七ウ八）

がその、本巻における例であるが、この語の初出も従来、永久四年百首や讃岐典侍日記などの例があげられてゐる。院政ごろから文献に姿をあらはす語であつて、まだ色葉字類抄にはあらはれてゐないものである。「オビタタシ」の場合と近似したものといつてよい。前に倣つて少し後のものを見るな

らば次の如くである。

認クドク 話クドク 詢クドク (温故知新書)

口説クドク 又云認 又云詢 (天正十八年刊節用集)

口説クドク 述懐ノ意也ノ詢 認クドク (黒本本節用集)

詢クドクノシル 認クドク 口説クドク 三字義同述徳意也 (伊京集)

詢クドク 口説クドク (饅頭屋本節用集)

詢 認 口説 已上三義同述懐義 (枳園本節用集)

これらの類には

イシユミ

カナモノ

キセナガ

クサズリ

ヒタタレ

ユブクロ

などの武士にゆかり深い、特殊の用語を別にしても（それらについて前代の文献に例の見えぬことはさして異とするに足らない）、決して少くないのである。一々あげてそれを証明すると際限がないが、「アスコココ」「アナニクヤ」「アハ」「アハヤ」「イツソク」「イケドル」「イヤイヤ」「イツカ」「イロクロシ」「イタジキ」「イツクシム」「ウシロメタナシ」「ウロクヅ」「大ヤウゲニ」「オホゴエ」「思トドマル」「カコム」「カルシム」「カタアシ」「トキ」「クヤム」「クダシ」「クラク(ウ)ス」「ケシカル」「コゴエ」「コブネ」「サカラフ」「サシモ」「サルニテモ」「サキワカツ」「サ

ヤメク」「シキナミニ」「シバシモ」「シタハシ」「シメナハ」「ソト」「ソソロク」「ソソシヤウ」「タカラカニ」「タマツサ」「タフダリ」「チツト」「中門」「ツカノマ」「ツト」「ツナヌク」「ツヤツヤ」「テニテニ」「トウトウ」「ナギ」「ナニカハ」「ニラマフ」「ノドム」「ヒキハル」「ヒシト」「ヒシメク」「ムズムズト」「ムツノク」「ムネト」「モダユ」「ユフザレ」「ヨツテ」「ワラベ」などはそれぞれあつて、総じて、語そのものが、平安朝末頃までに、漢字に対応せしめられて訓として定着することがなかつたものか、それとも新時代に文章語として登場したものであらうと思はれるのである。勿論の中には「イロクロシ」などのやうに既にありうる筈のものもあるのであるが。

四

かくして観察を進めると、熱田本平家物語巻第二において宛て字と思はれるものの中、かなりのものは、いはゞ止むを得ざるに出たもののやうにも見えて来るのである。前引の、玉井幸助氏の解説で二字連結の場合の宛字として挙げられた十五例でも決して由緒無きことではないと、筆者には、解されるのである。前号にあげた第一表と、前掲の第二表とを合はせ見られると明かであるが、二字熱合字によつて表記された語（又は熟した連語）は次の通りである。参考の為に巻第三より巻第十二に至る十巻についての大略の調査の結果を附加しておく。これを第三表とする。

第三表

- 一切（ツヤツヤ）
- 一向（ヒタ・ヒタスラ）
- 一周（ヒトトセ）
- 三五（セウセウ）
- 下手（サシモ）
- 不及（ヨモ）
- 不哉（イヤ）
- 不祥（オボツカナシ）
- 不知（イサ）
- 不久（シバシ）
- 今日（ケフ）
- 今年（コトシ）
- 今霄（コヨヒ）
- 今朝（ケサ）
- 今夜（コヨヒ）
- 以降（コノカタ）
- 何事（ナジカハ）
- 例符（ツネヨリモ）
- 元来（モトヨリ）
- 先表（ハカラヒ）
- 凡優（ユエシ）
- 加之（シカノミナラズ）

南北 (サ、メク)
可増 (アナニク)
周関 (ヒト、セ)
嘸咄 (カシコマル)
堅要 (カタミ)
夜昼 (アケケレ)
奉為 (オホシタメ)
如何 (イカ、イカニ・イカニモ・イカナル・イカンカ)
小選 (シバラク)
小時 (シバラク)
少縁 (オボロケ)
左右 (トカウ・トモカクモ・トモカウモ)
年来 (トシゴロ)
引導 (ミチビク)
強面 (ツレナシ)
徒然 (ツレヅレ)
急々 (トウトウ)
恐怖 (オノノク)
想像 (オモヒヤル)
憧憬 (アハツ)
憶昔 (ムカシ)
所謂 (イハユル)
挙動 (アリサマ)
散々 (ハラハラ・チリヂリ・サンザン)

数多 (アマタ)
巨来 (ケサヨリ)
早晚 (イツシカ)
昨日 (キノフ)
昨夜 (ヨウベ)
時勢 (イマヤウ)
暫矣 (アカラサマ)
有繫 (サスガ)
東西 (アスコココ)
水輜 (スハマ)
流車 (サスガ)
荒々 (ハラハラ)
無惡 (サガナサ)
無限 (ソコハカト・ソコハカトナキ)
片時 (ツカノマ)
特地 (ナニトナウ)
現世 (ウキヨ)
発々 (ハラハラ)
省尋 (オボシ)
種々 (サマザマ)
終道 (ミチスガラ)
終夜 (ヨモスガラ)
旧来 (モトヨリ)
莫太 (イクラ)

蕭索 (サハガシ)
躑躅 (フシマロブ)
蹂躪 (ムスムスト)
醜偏 (イロクロシ)
霾靄 (クラヤミ)
霏々 (ヨクヨク)
頓首 (ウナヅク)
頷状 (ウナヅク)
顔面 (ツレナシ・カナシ)
體勢 (アリサマ)

卷第三における新出

憶念 (オモフ)
占狂 (ヨリマシ)
凡夫 (タダビト)
何時 (イツシカ)
逝去 (ユクヘ)
由来 (ユクヘ)
向後 (ユクヘ)
長閑 (ノドカ)
皆悉 (サナガラ)
徘徊 (ヤスラフ)
穩便 (オダヤカ)
委細 (クハシ)

世間 (ヨノナカ)
良久 (ヤヤヒサシ)
等閑 (ナホザリガテラ)
勾当 (イヒアハス)
将相 (キンダチ)
霄日 (ヨベ)
終霄 (ヨモスガラ)
憶在 (ムカシ)

卷第四における新出

四方 (オモフサマ)
造次 (シバラク)
首途 (カドイデ)
孤独 (サミシゲ)
挙動 (ハタラキ・フルマフ)
去年 (ゴゾ)
若箇 (イカバカリ)
忿劇 (イソガシゲ)
会釈 (アヒシラフ)
容儀 (スガタ)
当年 (コトシ)
斯須 (シバラク)
近日 (コノコロ)
在昔 (ムカシ)

去来 (イサヤ)

近會 (チカゴロ)

迅推 (イトケヤスシ)

奈何 (イカ)

如形 (マネ)

会命 (ホノボノ)

尋常 (ヨノツネ)

深更 (アカツキ)

勁捷 (ハヤワザ)

外心 (ウトマシ)

中古 (ナカゴロ)

日来 (ヒゴロ)

名号 (ナヅク)

卷第五における新出

禁忌 (イマイマシ)

邂逅 (タマサカ)

発出 (サカリナリ)

境節 (オリフシ)

風流 (オモシロシ)

両般 (フタタビ)

時節 (オリフシ)

愚々 (オメオメ)

為堅 (ヨダツ)

擬宜 (アテガフ)

且夫 (カクノゴトシ)

来客 (マラウト)

漏躡 (フケユク)

五明 (アフギ)

且干 (チ、ハカリ)

当初 (ソノカミ)

浅聴 (アサマシ) (マン)

卷第六における新出

未曾有 (メヅラシ)

昼日 (ヒネモス)

道奇 (ハカバカシ)

世俗 (ヨノツネ)

白地 (アガラサマ)

当时 (ソノカミ)

蜜言 (サ、ヤク)

手習 (テマサグリ)

両辺 (アナタコナタ)

向後 (ユキカタ)

努々 (ユメユメ)

一々 (タタク)

霄々 (ホトホト)

佐佑 (トカウ)

支置 (フルマフ)
云々 (トニカクニ)
近馴 (ナジミ)
首旒 (カドデ)
求守 (ヨリツク)
熟痔 (アツチ)
草鞋 (ワランツ)
行縵 (ハバキ)
扶球 (ヨリカ、ル)
固辞 (イナブ)
黄雨 (サミダレ)
櫛子 (ウチテノコツチ)
威儀 (キラメク)
土器 (カハラケ)
干時 (キコシメス)
流来 (ウカレク)
安慰 (ナグサム)
知慧 (サカシ)
向來 (ウツ)

卷第七における新出

独自 (スゲナシ)
繼哉 (イサヤ)
為躰 (テイタラク)

慧々 (サカサカシ)
周章 (アハタタシ)
多数 (イクラ)
余波 (ナゴリ)
急雨 (ムラサメ)
旅枕 (クサマクラ)
乘某 (ナニガシ)

卷第八における新出

疎略 (フタゴコロ)
直下 (ミオロス・ミクダス)
弹呵 (シカル)
寵人 (キリフト)
浮雲 (アブナシ)

卷第九における新出

歎冬 (ヤマブキ)
不審 (オボツカナサ)
深茂 (シグラフ)
晚鐘 (イリアヒ)
衿袷 (カレコレ)
若且 (シノノメ)
浮岩 (ウカル)
容刑 (カタチ)

卷第十における新出

云何 (イカ)

春養 (ナグサミ)

長活 (ナガラフ)

薄暮 (ユフマグレ)

嫌妨 (イブセシ)

向前 (コシカタ)

賢哲 (カシコシ)

夙夜 (ヨモスガラ)

貞面 (ミメカタチ)

声花 (ハナヤカ)

面親 (マノアタリ)

達夜 (ヨモスガラ)

卷第十一における新出

浮歩 (アコガル)

追風 (オヒテ)

以往 (アナタ)

傍輩 (ドシ)

浮淺 (アブナシ)

端正 (キラキラシ)

細碎 (ツタツタ)

早速 (イチハヤシ)

黙止 (ヤム)

荒麿 (アラケナシ)

卷第十二における新出

形気 (スガタ)

傳傳 (メノト)

悶絶 (モダユ)

宿直 (トノキ)

狼藉 (ミダリガハシ)

音信 (オトヅル)

右第三表によつて一覽せられるならば、その用法が、決して、単なる宛て字などといふべきものでないことが容易に察せられる筈である。今眼を以てのみ古代を見るべからざることは既に云ひ古るされたことである。 (未完)

(附記)

本誌第十号の分については、二三辱知よりの御教示を得た。その趣を体して今回それを訂正してあるところがある。

尚、本稿は前号の(一)と共に、昭和三十一年度文部省科学研究助成補助金(助成研究)の恩恵によつて成つた。その報告を兼ねてゐるものと諒せられたい。